

平成 31 年 3 月 25 日

平成 30 年度東洋学研究情報センター機関推進プロジェクト実施報告書（項目 1～6）

1. プロジェクト名

富山妙子コレクション—第三世界と Narrative Art

2. 申請研究者

真鍋 祐子 東京大学東洋文化研究所・教授

共同研究者

Rebecca Jennison 京都精華大学・教授

小林宏道 多摩美術大学美術館・学芸員、事務課長

稲葉（藤村）真以 光云大学校・副教授

金子毅 聖学院大学 准教授

3. 研究期間

平成 26 年 4 月 1 日から平成 33 年 3 月 31 日（7 年間）

4. プロジェクトの趣旨、全体計画（400 字程度）

申請者は画家・富山妙子氏より所蔵する資料・書籍の寄贈を受け、その整理と一般公開のためのデータベース構築を進めて日・英語の WEB サイトを開設し、最終的にはノースウェスタン大学歴史学部の Laura Hein 教授（日本近現代史）が主宰する”*Imagination without Borders*” (<http://sites.northwestern.edu/iwb/>)等と相互にリンクさせることを目的として、本プロジェクトを申請するものである。

炭坑・韓国民主化闘争・慰安婦等を題材とした作品群が、主に 1970 年代以降、トランスナショナルなネットワーク（キリスト教、アムネスティ等）を通じて欧米経由で国際的な人権運動に与し、非合法的に東南アジアやアフリカ諸国に流出したことで当該国の民主化を促す等の **narrative art** の役割をはたした点に焦点をあてる。氏の作品がコラージュされた各国の装丁本、冊子、ポスター、チラシの他、インタビュー記事、作品の伝播に伴い生じた各国知識人との交流に関わる手紙等の一次資料、取材旅行で撮影された写真等（1960 年代の中南米、オリエントを含む）の民族誌資料、制作のベースをなす文献等を取り扱うことで、第三世界におけるアートを通じた民主化プロセスを解明する。

5. 今年度の研究実施状況（400 字程度）

富山氏の制作活動は 1950 年代の鉱山・炭坑に始まり、1960 年代に炭坑移民を追って中南米に取材、西洋近代美術へのカウンターカルチャーとしての **narrative art** に出会って後、オリエント（西アジア、中央アジア、南アジア）にも取材した。1970～80 年代には韓国民

民主化運動を題材とした一連の作品で社会参与し、1980年代以降は朝鮮人強制連行、じゃばゆきさん、慰安婦、満洲をテーマとした。平成29年度までにはほぼ資料の受贈と整理を終えたが、今年度はいまだ断片的に富山の手元に残る資料を受け入れ、リストを更新するとともに、DB化にあたりこれらをどのように体系化するかについての議論を重ねた。

今年度は、2020年に光州民主化運動40周年を控えた光州市立美術館、光州市立5・18民主化運動記録館などの機関より、光州事件とそれに先立つ韓国民主化運動を題材にした富山作品への関心が寄せられ、関係者の訪問を受けた。情報交換を行なうとともに、今後の協力関係についても確認した。

また平成29年度に獲得した競争的外部資金を活用して、韓国、ドイツ、アメリカ、メキシコに加え、タイとフィリピンにおいても富山資料の裏付けとなる調査を実施した。

6. 今年度の研究成果の概要（400字程度）

2件の競争的外部資金、すなわちJFE21世紀財団・アジア歴史研究助成（平成29年1月～平成30年12月）および、科研費・挑戦的研究（開拓）（平成29年7月～平成33年3月）を活用して、以下の成果をあげることができた。

第一に、韓国、ドイツ、メキシコ、タイ、フィリピンで調査を実施し、1970～80年代の世界史的規模での民主化運動と富山作品とのかかわりについて、当事者たちの証言を得ることができた。そうした事例の一例を聴く催しとして、メキシコからAlfredo Romero教授（メキシコ国立自治大学）を招待し、「ラテンアメリカと朝鮮半島—越境するアート、崔承喜と富山妙子をめぐって」と題した国際学術セミナーを実施した（2018年7月6日）。

第二に、富山自身が1960年代のブラジル、メキシコ、キューバでの体験を語る2013年制作の未公開映像を所蔵するドキュメンタリー作家・岡村淳氏に委託して、引き続き富山の証言および、制作過程、富山自身による作品解説などの映像を記録し、シリーズで作品化する作業にも着手した。そのうちの1編「狐とリハビリ」は、岡村氏を講師とする国際学術セミナー「富山妙子と炭鉱、ラテンアメリカへの旅—上野英信の光と影を照射する」（2018年11月10日）において上映された。